

農業にはさまざまなリスクが伴う。災害や価格低下などによる収入減、食の安全、雇用や環境汚染、農業散布などを巡るトラブル。交通事故や建設業の事故死は減っても、一向に減らない農作業事故死など。

これらのリスク回避策として有効とされるのが、農業生産工程管理（GAP）の手法だ。直訳すれば「良い農業のやり方」。計画・実行・評価・改善のPDCAサイクルを回して業務を見直し、改善を続けることでリスクを最小化。食品の安全と環境保全、労働安全をきちんと確保できる「良い農業」を目指す。

J Aグループ山形も経営改善に生かす観点からGAP

農業法人のリスク管理

P手法の導入を図っている。ただ、GAP認証取得を前提とせず、取得は販売などで必要性が生じたときに対応する立場だ。

県地域営農法人協議会と地域・担い手サポートセンターが17、18の両日、山形市と酒田市で法人の安定運営に向け開いた経営セミナーで、すぎき労務経営コンサルタンツ代表の鈴木大輔氏（仙台市）はこう述べた。「GAPは、リスクから守るために『する（取り組む）』もの。GAP認証は、取引先からの求めや東京五輪・パラリンピックへの出荷、輸出など、必要となったら取得すればいい」

J A全農山形副部長の齋藤義紀氏も「GAPは、リスクを小さくしていくための守りの取り組み」と、講演で強調した。セミナーに出席した米沢市の農事組合法人「ドリームファクトリー」の八巻美津天理事は「GAPは有利販売などの面から捉えがちだが、リスク回避策として重要との認識を新たにしたい」と話し、大蔵村の「このファーム」の国分亨代表は「経営には、攻めるだけでなく、守りも大切であることを改めて感じた」と語った。

鈴木氏は講演をこう締めくくった。「リスク管理は経営管理そのもの。リスクを減らすことはコストを減らすことにもなる。鉄壁の守りが経営を伸ばす」

GAPで守り万全に



リスク管理の重要性を学んだ経営セミナー